

福岡県立大学附属研究所研究奨励交付金事業 (国際研究)

社会変動期にあるネパールの若年層の抑うつや 自殺の増加と階層差の関連：日本との比較から



福岡県立大学 人間社会学部
吉岡和子・佐野麻由子

報告の概要

研究の進捗報告

1. 研究の目的
2. 先行研究からの仮説
3. 調査の概要
4. 調査から得られた知見
5. 今後の研究計画



本研究の成果の一部は人間社会学部紀要第33巻第2号に掲載

研究プロジェクトの目的

日本とネパールの比較を通して、先進国・途上国の別、文化的差異に関わらず普遍的にみることができる若年層の抑うつ・不安や自殺の構造的要因を明らかにすること

問題の背景

世界でみられる若者の精神疾患、自殺の増加

- アメリカ: 経済の黄金時代を過ぎた1970年代に若年層における抑うつが社会問題化
- 日本: バブル崩壊後1990年代に社会問題化
- ネパール: 2010年代に社会問題化

2018年 2075年公衆衛生サービス法第3条第4項(e)の制定

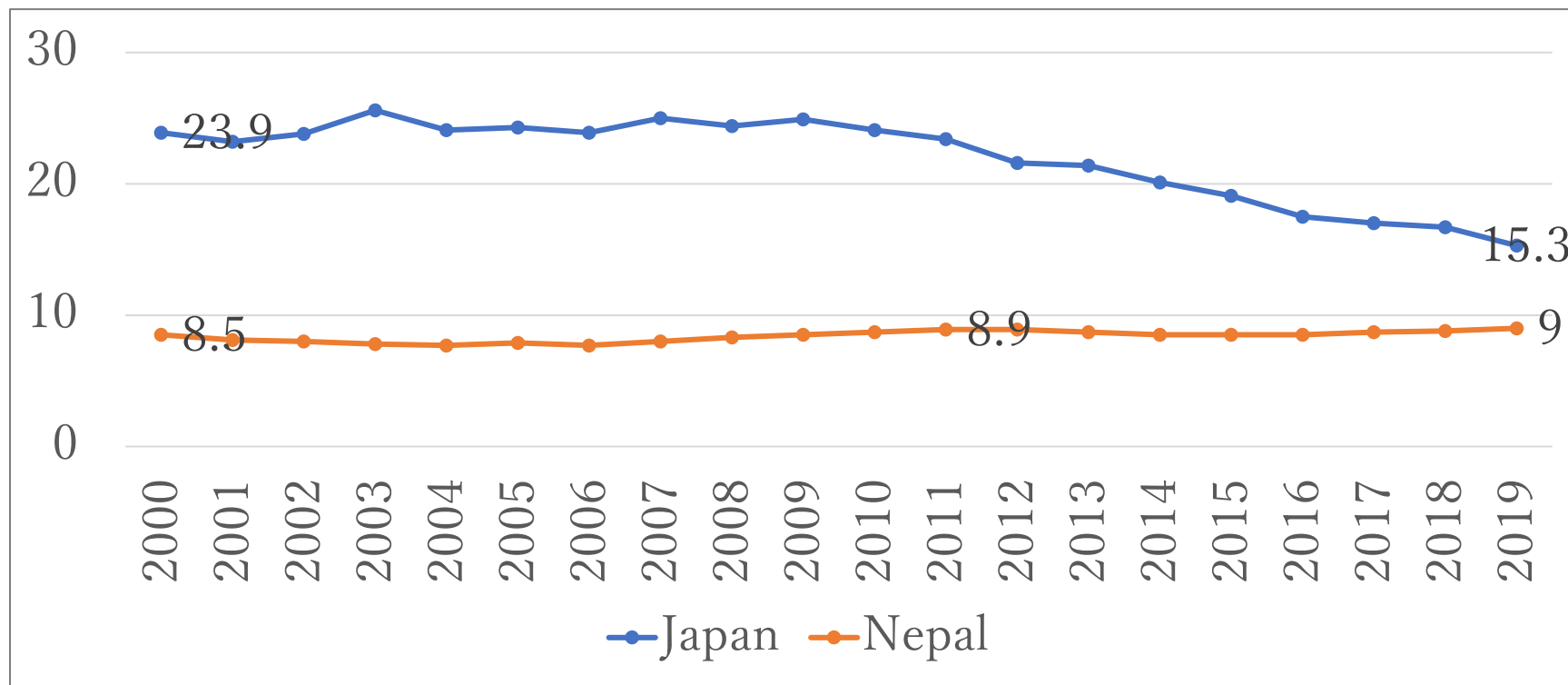
2019年 国家保健政策第6.17.5項の制定

2020年 初の総合調査「ネパール全国精神衛生調査 2020」

2022年 WHOによるNepal-WHO Special Initiative for Mental Health

普遍的な構造的要因があるのではないか？

World Bank World Development Indicators にみる人口10万人あたりの自殺者数



メディアでの関心の高まり

「Young people and mental health in changing world」(Republica October 10, 2018)

「Nepal's mental health crisis: A lack of awareness and infrastructure is hindering efforts to address this burgeoning problem」(The Kathmandu Post August 23, 2023)

日本での精神疾患の増加に関する 先行研究から導出された観点

(1) うつ病の概念の広がりや自己診断の増加による精神疾患の医療化 (志水 2014; Horwitz 2010; 松崎 2011)

(2) 精神疾患を生起させる構造的要因: 労働、家族、文化などの社会変容や個人の性格やストレス耐性の低下 (佐藤 2013)

(3) 抑うつを受け止める既存の体制の機能不全 (辻内・河野 1999)

例 ジャンクリ (Jankris) などの呪術医の減少

先行研究から導出した3つの問い

- 問1 ネパールでは精神疾患の医療化がいつから始まったのか？
- 問2 うつ病を発症させる社会構造の変化としてどのようなものがあるのか？
- 問3 精神疾患の医療化以前には、どのような民族的、伝統的なメンタルヘルス・インフラストラクチャーがあったのか、それは、現在、どのように機能しているのか

本報告では、問2に関連した調査結果を報告

調査の概要

- 文献調査と聞き取り調査
- 聞き取り調査は2024年9月9日～23日に実施

インフォーマント	聞き取り時期
A教授(国際開発学)	2024年9月10日
Bさん(学生)	2024年9月12日
Cさん(学生)	2024年9月12日
Dさん(フィールドワーカー)	2024年9月12日
Eさん(学生)	2024年9月12日
Fさん(学生)	2024年9月12日
Gさん(学生)	2024年9月12日
Hさん(学生)	2024年9月12日
Iさん(学生)	2024年9月12日
Jさん(学生)	2024年9月12日
Kさん(学生)	2024年9月12日
L教授(精神医学)	2024年9月10日

得られた知見

日本とネパールに共通する点

(1) 不安・抑うつの要因として労働、家族、文化などの社会変容がある

政治への幻滅やマオイスト紛争(1996～2006年)のトラウマ、同棲など新しい家族関係の選択から生じる悩み、海外への出稼ぎに伴う移住の増加による核家族化、物価上昇による経済的困難さなど

政治そのものが幻滅する要因で、国にいたくない。別の国に行きたい。将来の夢を描けない。マオイストの紛争で2万人も死んだ。今も目の前で家族を殺された人の傷は癒えていない。

必要な仕事が国内で得られないため、人々は外に出たがります。外国で働きたい、または逃げ出したいのです。

...両親は同棲関係にあることを知りません。寮にしていると考えているので、それが明らかになれば、問題になります。両親との間に問題があると、結婚してもうまくいかないかもしれないので、それが悩みを引き起こすでしょう。

(2)特に、就職機会に関連する学業のプレッシャーやソーシャルメディアを通して目に入る理想と現実とのギャップなどがある

主に社会的プレッシャーと学業の評価が原因で、多くの若者が問題を抱えている。

携帯の画面で見るライフスタイルが自分のライフスタイルを反映していない場合、それは彼らの精神衛生に非常に悪影響を及ぼす。なぜなら、彼らは置いていかれ、他の友達ほど多くのことをしていない、成功していないと感じるからだ

得られた知見

ネパールに特徴的な点

(1) ネパールでは人々が強い結びつきの中にあり、息苦しさがある反面、孤立（物理的に他者との接点が少ない状態）が防止されている

家族の絆がかなり強いと、何が起きているのかを表現するのが難しいのです。家族は安全な場所なので、家族や家族の問題について話したい場合、どこに行けばいいのでしょうか。

誰かがパーティーに2回も立ち寄らないと、人々はその人に連絡して、元気ですか、何をしているのですか尋ねる。

ネパールのレストラン10軒に行って、人々を観察してみると、1つのテーブルで1人だけでお茶を飲んでいる人を見かけるのは極稀だ。私たちにとって、孤独にならないことは文化です。文化が、私たちが孤独にすることを防いでいる。

(2) 対人不安の要因が「イメージされた抽象的な他者」ではなく、「具体的な他者や現実的な問題」にある

専門家との「ひきこもり」についての意見交換において

日本では「対人不安」といったときの「対人」には「イメージされた抽象的な他者」が想定されていると話したところ、ネパールでは「具体的な他者 (living other)」が想定されると述べられた。

結論

- ネパール：拡大家族で家族の絆が大変強く、多世代にわたる様々な関係性が身近にあり、他者との葛藤やサポート経験が多い。自己決定の幅は狭いが選択に伴うリスクは少ない。

→具体的な他者や現実的な問題への不安？

- 日本：核家族化が進み、関係性のバラエティが少なく、葛藤やサポートを経験できる機会が少ない。自己決定の幅は広いが、選択に伴うリスクは大きい。

→抽象的な他者や漠然とした不安？

対人不安、家族関係、人間関係、社会的統合・社会的規制、自己決定の幅における両国の比較

	日本	ネパール
対人不安	抽象的・空想的 (Imaginary) 抽象化・空想化された他者への不安、見えない他者の評価への恐れ	具体的・現実的 (Living) 具体的な他者への不安、将来や生活と直結した現実的・具体的な不安
家族関係	核家族 家族の個人化	拡大家族 家族機能が健在
人間関係	有機的連帯に近い？ ゆるやかなつながり	機械的連帯に近い？ 拡大家族に連なる強いつながり
社会的統合 (social integrity) 社会的規制 (social regulation)	相対的に弱い？ 他者との葛藤やサポート経験が少ない	相対的に強い？ 他者との葛藤やサポート経験が多い
自己決定の幅	幅は広いがリスクは高い？	幅は狭いがリスクは少ない？

今後の研究計画

- 青年の抑うつや不安（経済、対人関係、学校生活、将来など）と対人関係の在り方（家族機能、地縁によるサポート、コミュニケーション）、社会構造（機械的連帯・有機的連帯、メリトクラシー、個人化の度合い等）との関連を検討する
- 3月～ネパールの研究者と変数について協議
- 7月～カトマンズ大学、トリブバン大学の研究者と協働で両国で質問紙調査を実施
- 質問紙調査内で協力者を募り、聞き取り調査も行い、量的分析と関連させながら質的分析を行う

現在, 検討している変数は下表のとおりである。
2025年3月から, ネパールの研究者との協議を経て, 10分程度で
行える質問紙を作成する予定である。

変数名	概要	参照する先行研究など
対人不安	特定他者不安尺度 不特定他者不安尺度	角尾美奈(2003)「対人不安傾向の再検討—不特定の他者に対する不安傾向と特定の他者に対する不安傾向」
精神的健康	・GHQ-12(「不安・抑うつ」「活動障害」)	新納美美・森 俊夫(2011)「企業労働者への調査に基づいた日本版GHQ精神健康調査票12項目版(GHQ-12)の信頼性と妥当性の検討」
	・SWLS(Well-beingを測定する尺度)	大石繁宏(2009)『幸せを科学する 心理学からわかったこと』
自己意識	・内省的態度, 脱慣習的態度, 操作的態度, 先取態度に関わる尺度	小川豊武他(2024)『最近の大学生の社会学』
	・文化的自己観	高田利武ら(2012)「相互独立的—相互協調的自己観尺度(改訂版の作成)」
コミュニケーション	態度や表情の抑制, 気持ちや考えの表明に関わる尺度	友枝敏雄(2015)『リスク社会を生きる若者たち』
家族機能	FFS(情緒的絆と結束, 外部との関係, 家族規範, 役割と責任, 経済的資源, コミュニケーション)	神崎ら(2012)「FFS (家族機能尺度)日本語版の開発養育期の家族を対象とした信頼性と妥当性の検討」
友人関係	友人関係志向に関わる尺度	友枝敏雄(2015)『リスク社会を生きる若者たち』
社会システム	自己決定感、業績主義への評価, リスク認知に関わる尺度	電通総研「世界価値観調査」

主要参考文献

- ・Horwitz AV, 2010, “How an age of anxiety became an age of depression,” The Milbank Quarterly, 88(1):112-38.
- ・Karki A, Thapa B, Pradhan PMS, and Basel P, 2022, “Depression, anxiety and stress among high school students: A cross-sectional study in an urban municipality of Kathmandu, Nepal,” PLOS Glob Public Health, 2(5) (Retrieved August 12, 2024, <https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC10022099/>).
- ・河合隼雄・谷川俊太郎・山田太一, 2000, 『家族はどこへ行くのか』岩波書店, 2-4.
- ・小藪明生・山田真茂留, 2015, 「若者的コミュニケーションの現在——高校生の友人関係志向に見る——」友枝敏雄編『リスク社会を生きる若者たち——高校生の意識調査から——』大阪大学出版会, 57-76.
- ・松崎一葉, 2011, 「うつ増加の背景は何か」『ビジネス・レーバー・トレンド2011年7月号』: 31-32..
- ・西園昌久, 1996, 「日本文化と神経症」『日本語臨床 1. 恥 北山修(編)』星和書店, pp3-24.
- ・佐藤雅浩, 2013, 『精神疾患言説の歴史社会学——「心の病」はなぜ流行するのか』新曜社.
- ・佐藤雅浩, 2022, 「精神疾患の流行に関する社会学的研究(3)」『埼玉大学紀要(教養学部)』58(1): 45-66.
- ・志水洋人, 2014, 「医療化論の動向: 逸脱行動の医療化から疾患概念の拡大へ」『年報人間科学』35: 39-51.
- ・辻内琢也・河野友信, 1999, 「文化人類学と心身医学」『心身医学』39(8): 585-593.

ご清聴ありがとうございました

